

大台ヶ原シカ保護管理計画にかかる所長からのメッセージ (特に、市民・NGOの方々へ)

10月31日に第3回大台ヶ原シカ保護管理計画検討会が開催され、計画案が了承されました。事前の市民説明会やパブリックコメントで、多くの方々から貴重なご意見をいただき感謝申しあげます。

反対のご意見は多数にのぼり、その事実を真摯に受け止めさせていただきました。それらの意見の根底を洞察しますと、大台ヶ原のような本来自然の成り行きにまかせるべき自然保護のいわゆる聖域で、なぜ今、その自然の一部であり象徴としてのシカを相当数排除しなくてはならないのかということだと思います。加えて、動物愛護又は生命の尊厳からのものや、特に市民への役所的な姿勢などに対する批判的見方などです。

検討会の席上、私は、この大台ヶ原の問題は、通常の国立公園や野生生物保護の社会的・相対的価値観を含む普遍的な縮図で、市民からのご意見は全て理解できると申しあげました。こんなにいろいろ意見があるのに、役所はなぜそんなに平然としていられるのかと思われるでしょう。それは、環境問題において、通常誰もが究極の目指すところはほぼ一緒で、そこへのアプローチや前提となる基本的認識が社会的各主体によって異なるのではないかと思うからです。

検討会の翌日の新聞記事を見ますと、小原秀雄氏がこんなコメントをしていました。「自然のコントロールには大局的な観点が必要」と。まさにそのとおりで、大局的な観点というのは、目指すところやそもそも論を含みます。

勿論、とらえ方に空間的、時間的、質的な差はありますし、それに応じたアプローチも範囲、方法・手段、程度が段階によって違ってきます。

そこで、慎重な検討が必要となり、様々な議論により合意形成が図られます。

そんなプロセス論はわかっているとおっしゃるでしょう。

さて、目指すところは、環境施策の基本の一つでもある「自然との共生」です。それへのアプローチとしてシカの個体数調整が一つの手段として浮かび上がってきたのは、実に辛いことです。多くの市民の意見もあり、より辛さがつります。しかし、それを今しなければ、シカの生息基盤としての生態系もすべて崩れるとしたら、苦渋の判断に迫られます。そのため、科学的な動物管理手法、全国的な現状、法令の運用や判断基準などに照らして、やや即物的、客観的に整理して、結論を導こうとします。また、同時にそうせざるを得なくしてしまった根本原因も考えようとします。その際、問題のすり替えやばかしはないだろうかと、自問自答するものです。

いろいろな人から話を聞きました。戦後まもなくから紀伊半島を歩いて、動植物や河川などを調査研究していたある人の話では、当時、ほとんどの山が豊かなブナ林などの天然林で、クマ、シカ、イノシシなどが湧くように生息していたとのこと。大台ヶ原や大峯は勿論原始性が高く、特異な存在ではあったが、周辺の広大なブナ林からすればごく一部にすぎないものであったとか。

話を聞き思いました。現在大台ヶ原を相対的な自然保護の聖域として区切ってしまっていること自体が、人間の都合でしかなかったのではないか。そのため、自然界のしわよせが、どこかに生じてくるのも理解に難くない。しかば、紀伊半島全体をなんとか豊かな森林に戻せないか。ただし、今すぐすべてというのは社会的に無理があるかと。

そこで、コアとなるべき自然を可能な限り維持しつつ、そこから周辺に向かって、ある程度ゆとりを持たせた範囲で緩衝生態系を順次再生することが必要となります。そうすれば、クマ、シカなど大型野生動物がゆとりを持って生息することができるでしょう。

また、自然本来の遷移を妨げたり、歪めたりする原因是、市民のご意見にもありましたとおり、他にいくつも考えられますし、それらの課題にも皆さんとともに取り組み解決していくかなくてはなりません。

そのためには更なる調査研究及び検討調整をしなくてはなりませんが、多くの社会経済的问题を含み、すぐには進みません。しかし、今、風が吹き始めているのです。全ての主体が共通のミッション(使命)を理解し携え、ゴールに到達するまで、何とかコアとなるべき部分が持ち堪えられなくてはならない。大台ヶ原のシカが、我々に何を語ってくれているか、理解しなくてならないのです。

この大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画作成に自然保護調整人としてこれまで3ヶ月間携わってきましたが、今後は、市民・NGOの自発的・積極的行動、場合によっては専門的知見が、大台ヶ原での問題提議を、眞の自然保護を訴えるための、各方面への大きなうねりとして下さることを願っています。

なお、上記の観点は、10月31日に保護管理検討会の「付帯提言」としてまとめられ、保護管理計画の一部として採択されましたので是非お読み下さい。検討委員の先生方も、一時的な応急措置を実施する間に、本質的な問題に対処する恒久措置への検討調整を強く望んでおられます。

米国あのイエローストン国立公園もかつてエルク(シカの一種)の個体数調整をしていましたが、市民の長年の反発などにより、現在は中止しています。その代わり、オオカミ基金(市民による被害補償金の一種)などを前提としたオオカミ導入、生態系の大規模な調査研究などを市民と一緒に進めています。

社会的により複雑な問題を抱える我が国では、(オオカミの導入は今のところ考えられませんが、)イエローストン以上に市民・NGO、地元住民・産業、関係機関の連携・協力が求められます。市民が次世代に伝えるべき自然を見極め、自ら飛び込んで汗することも期待しています。そのようなボランティアの方々には、当事務所のセミナールームはいつでも開放し、私もお付き合いさせていただき、かなり病んでいる日本の自然をどうしたらよいか、行政と市民・NGOの対等なパートナーシップの立場でとことん話し合っていき、実現可能な政策提言はどんどん環境政策に反映していきたいと思います。